

## 神の腕

桜人心都悩

芹沢は馬からおりて梶無川を眺めていた。梶無川は清らかに流れていた。芹沢はその日、村を回り歩いて不思議な噂を耳にした。梶無川に馬の尻尾を切り取る浮浪者が住みついているという噂である。馬を盗む者であれば解決せねばならない。しかしほんの少し馬の尻尾の毛を切り取るらしいのである。村人たちは気味が悪いと言っていた。

思うことがあり、芹沢はその場で立ち止まった。すると歩き疲れたらしい馬は梶無川に口を近づけ水を飲み始めた。芹沢は馬の整えられた毛並みを撫で馬から離れてみた。背を隠すほどに伸びた草の中に身を隠し、馬の様子を眺めていた。

しばらくした頃、馬を撫でまわす腕が現れた。持ち主は芹沢から見えない馬の側面に回り込んだようで、その顔は見えなかった。腕の持ち主はチツチツチと猫をあやす様に馬をなだめていた。尻尾を切り取る決定的な様子を目撃するべく、芹沢は馬の尻尾に注目した。腕は胴体から撫でるように尻、尻尾へと下りていき、整えられた毛並みをさらに整えるように右の手が尾を

梳いた。かと思ふと逆の手で焔めく刃を取り出したため、芹沢は仰天して草の中から飛び出した。

それは小柄な男であった。その姿をしつかりと目撃したことでさらに芹沢を驚かせたのは、盗人の右手が茶色く変色していたためである。妖か、狐か。ためらうことなく芹沢は彼のその右手を切りつけた。

切られた腕は血が出ることもなく、痛みにも声をあげることもなく。その盗人は芹沢から逃げていった。

芹沢は屋敷に戻った。今日のことを記録していると馬の番をしていた小僧が、連れていた馬の尻尾に何かついていると知らせた。芹沢は頭を抱えた。それは切った男の腕だったのである。執念深くもまだ馬の尾を掴んでいた。気味悪がった小僧の代わりに、芹沢はその腕を尾から離した。

馬の尾を掴んでいる指を一本ずつつまみ緩めていく。持ち主から離れているにも拘らず、その腕は脈打ち、人間の体温も持っていた。最後の指を尾から離した時、ふっとその温かみは消え、無機質な冷たさが指先に伝わった。その腕には木目が現れた。巧みにつくられた木彫りの腕に変わったのである。あまりの気味の悪さに芹沢はその腕を後日、寺社に預けようと考えた。

その晩の事であった。腕の持ち主が芹沢の元を訪れたのである。門番に止められ名を尋ねられると持ち主は

「梶無川で屋敷の主に腕を盗られた者でございます」

と答えた。芹沢は眠い目を擦りながら、身支度を整え、その男と面会した。

相対したその男は童のように小さな身であった。さらに腰が曲がっているために、年老いたようにも見える。所々穴の開いた、茶色く汚れた布をかぶり、その頭には一本の毛髪もなく、目玉が半分出かけていた。醜いとはこのような男のことを言うのだろう、と芹沢は慄いていた。

「腕を返していただきたいのです」

男は口を開いた。その口からは屎尿の匂いがした。芹沢は目の前の男に無礼を働かぬよう、自身の腿をつねって不快な気持ちを顔に出さぬように努めた。切った腕に触れた時から、自身が切った男は川の主であったのではないか、つまり神に相当する者だったのではないかと悩んでいたのである。側使に命じて、切り落とした腕を男の前まで持つてくると、男は腕になんやら薬を塗り付け、腕をもとの位置につけ直した。すると先ほどまで木彫りの腕だったそれは、男の意志のま

まに動くようになっていた。男は芹沢に見せるように右手の指を一つずつ折りたたみ、一つずつ開いて見せた。芹沢は笑みを絶やさぬように口角を歪ませていた。「もし、貴方様が切ったのが右手でなかったならば、僕は死んでいたところでした」

男は丁重に頭を下げ、お返しいただき、と感謝の意を込めた。

「無礼を承知で尋ねるが、その腕は」

「創り物でございます」

芹沢は男の腕をもう一度確かめた。茶色く変色してはいるものの、人間の腕として、肉が動き脈打っている。

「その腕を作った者は大層な医師か、技工か……」

芹沢は失礼に当たらぬように慎重に言葉を選んでいた。言葉を放つごとに脳裏に浮かぶのは、彼が話してきた村の人々の顔、梶無川の清らかさ、そして自身の首が飛ぶ姿であった。男は芹沢の態度に気を良くしたようで、目を細め、口の端を持ち上げると掠れた声で言った。

「僕は河原者。この右腕を除いては、ただの河原者でございます」

「右腕は」

「儂はこの右腕を、恐れ多くも神の腕だと思ふとりま  
す」

そう言つて、男は身の上を話し始めた。

「儂は生まれから河原者でございました。父は名もなき百姓。母は、それはそれは恐ろしく心の清らかな女でありました。儂は生まれ落ちた時には右腕がございませんでした。父は使い物にならん、梶無川に流してしまえ、と申されたそうで、母は腹を痛めて生んだ子を流すなどできず途方に暮れていたと言います。そうして辿り着いたは川の端に捨て置かれた小さな祠。そこには忘れ去られた水神様がいらつしやつたのだと母は仰います。三日三晩、その祠にて子の腕を祈りますと、四日目に村に旅人が現れました。その旅人は浮浪者、河原者のような風貌をしておりまして、その身は細々と骨が浮き、衣服は泥を被っていたと言います。その御方は宿を一晚尋ねてきました。小さな村でしたから、宿など大層なものはなく、母は粗末な事しか出来ぬが、と云うてその御方を泊めたのでございます。不思議な御方であつたと言います。近づくのも躊躇われるほどの匂いがし、衣服も水で落とせぬほど汚れていたにもかかわらず、ただ一度覗いた顔はとても美麗だつたと。母は粗末に扱つてはいけなないと働き、つく

したのでいいいます。その御方はただ一度、籠の中に入れられた幼い儂をみて頭を一つ撫で『可哀そうに』と仰つたそうで、それきり何も言わなかつたといひます。その晩、母が川の音を耳にしたそうです。不思議に思つた母が確かめると旅人はいなくなり、儂の腕が生えておつたそうでございます」

男は右腕を上げ、指を曲げて見せた。

「母の言うことではその御方は水神様だつたのだろうと。それ以来母は家の事の合間合間に川へ出かけ、落ち葉や泥を除き、儂を育ててくれたのでございました」

芹沢は梶無川の清らかさを思い出した。つい数年前に移つてきた芹沢は男の母のことは知らなかつたのだ。「それは大変申し訳ないことをした。神の腕を切りつけるなど、無礼を許してほしい」

芹沢が丁重に頭を下げると男は慌て、河原者なんぞに頭を下げてはいけない、と言つた。

「先刻申し上げました通り、儂は河原者じゃあ」

男は自身を卑下するように、膝を付き、頭を地にこすりつけた。そのへりくだった態度に、芹沢は先ほどまでの緊張が幾分か吹き飛んだ。そうして思つていた疑問を男に尋ねることにした。

「なぜ馬の尻尾を切り取るなどということを成されて

いたのだ」

男は膝をついたまま、顔だけを芹沢に向けた。そうして口をもごもごと動かしした後、怯えるように一言

「人形を作ろうと思つたのでございます」

と呟いた。その耳は紅潮しており、言い終わるとすぐに顔を隠してしまつた。

「このような身なりであれば、女子供から髪を貰うことなどできず、髪を買う金もなく……」

「なぜ人形を作ろうと思つたのだ」

「母が耄碌しているのでございます。ものを忘れ、幼子の様になつてしまう病にございます。そうであればと人形を与えてやりたかつたのですが、恥ずかしくも本当に貧しい身なれば、せめて不器用ながらも作れはしないかと」

そう続けた男の様子には先ほどまでの妖しさはすっかり消えてしまつていた。芹沢は自然に笑みがこぼれてしまつた。

「その腕はどれほどののか」

芹沢が尋ねると、男の目には再び妖しい光が宿つた。男は自信からくるのか、羞恥が抜け、真つ直ぐに芹沢を見つめてきた。

「まだ人に見せたことはありませんが、よくできたも

のだと思つております。この腕は『神の腕』にありますから」

芹沢は男の狂気的な目に一瞬の迷いがあることを見逃さなかつた。そして男がその迷いを隠そうとしていくことにも気が付いた。腕への絶対的な自信、一方で河原者と自身を貶す卑屈さ、この二つが共存する人間性に芹沢は惹かれていたのであつた。

「で、あれば。一度その腕を見せては貰えぬだろうか」  
芹沢の申し出に男はまた地に頭をつけて承諾した。

その日以降、芹沢の屋敷には魚を模した木彫りが届けられるようになった。屋敷前の梅の枝に供えられるようにして魚がぶら下げられていた。芹沢はそのうちの一匹を屋敷に飾り、一匹を水神の祠に奉納した。

その木彫りは本当に素晴らしい出来であつた。木彫りとは思えぬほど、息吹く魚の生々しさ。鱗が光に当たり、一枚一枚違う輝きで反射した。魚は泳いでいる様を一瞬切り取つたように、胴をくねらせ、身をひるがえし、ヒレの躍動を顕していた。芹沢は男を呼び寄せた。

「この魚を売つたりはしないのか」

「男は首を横に振つた。」

「この腕は『神の腕』でありますれば、身を肥やすために利用するのはよろしくないことでございませう」

芹沢は男の言葉を嘘ではないと思った。しかしやはり何か隠しているとも感じた。芹沢はそれ以上、追求することは無かった。勿論、芹沢も男の意向を尊重し、魚を売ることもしなかった。

男はそれ以降も魚を芹沢に献上した。どの魚も水に浸せばすぐに泳いで逃げてしまいそうなほどに秀逸な作であった。ただ一度、ほんの気まぐれで芹沢は魚を屋敷の訪問者に見せたことがあった。芹沢は深く後悔した。その魚は見た人を魅了したのである。それは狂ったようであった。一度見せたことで、その人は後も魚を目で追った。何の話をも心ここにあらざと言った顔であった。しつこくどこで手に入れたものか聞かれた。手に入れられないのなら、せめて誰の作かを判明させようとあらゆる手を使われた。魚が歌を歌い、夜も眠れぬと書状が届いた。それほど欲しいのであればと芹沢は男に許可を取り、来訪者に魚を一匹渡した。

「この腕は『神の腕』でありますれば、そのようなこともありますのでございませう……」

魚を作った男は悲しそうな目で芹沢の話を聞いていた。その男の目を見てみると芹沢は深い後悔に襲われた。そしてお詫びとしてある程度の生活できるような金を包んだ。しかし男はその金を受け取らなかった。その代わりに魚を渡す条件を加えたのである。

「これから毎日魚をこの屋敷に届けませう。もしも魚が途絶えた時は、どうか私のことなど忘れてください」

そうして男はその後魚を届けた。しかし魚は神の腕で作られたと思えぬほどに不格好なものであった。芹沢はすぐにその魚が男の左腕で作られたものだと気が付いた。男を責めることなく、全ての届け物のうち、一匹を水神の祠に奉納し、一匹を屋敷に飾った。

芹沢は男が左腕で魚を作るようになってから、魚が届くのが楽しみになっていた。これは芹沢には説明のできない感情であった。左腕で作られた魚はお世辞にも巧いとは言えない。子どもがお遊びで作ったような拙いものである。鱗の形も大きさもバラバラである。動きはなく釣りあげられ息絶えた魚のようだった。神の腕の作は動き出しそうな緊張感があったが、左腕の作はまな板の上の安らぎがあった。その魚たちは日を追うごとに「神の腕」に近づいていた。男の日進月歩

が芹沢の楽しみになっていたのである。

芹沢は一度村の見回りの後に男の家へと向かった。

男の家は梶無川の流れに逆らって、上流の川辺にあった。それは芹沢の屋敷に比べると粗末の上なく、家には蠅が集っていた。芹沢は家の様相を見て訪ねることを躊躇したが、その一瞬で家の中から響く木を削る音が絶えぬことに気が付いた。シュツシュツ、シュツシュツ、金属と木が触れ、裂け、削れていく音。覗いてみると男は口を固く結び、深く呼吸をしながら左腕で一刀打ち込んでいる。その男の光景は神の腕で作られた魚を見た時以上に芹沢の息を止める気迫があった。神に近づかんとしている気迫である。男は一息つくといつの間にか目の前に座っている芹沢に気が付いた。そうして申し訳がなさそうに、大急ぎでもてなす準備を始めた。

「よい、よい。もうしばらく魚を見ているも良いだろうか」

芹沢がそう言うと、男はまた作業に取り掛かった。

男の後ろには何本もの魚の成り損ないが置かれていた。芹沢がその一つを手にとると、男は左腕を止めて一言

「贋物が本物になることはできませんか」

と芹沢に尋ねた。芹沢は、魚が生まれていく様子を

眺めながら男の問いを考えた。木彫りの魚はどうあつても生きた魚にはなれない。木彫りを川に浮かべても流れていくことはあれど泳ぐことは無い。この時、男はもう数年ほど左腕の作を芹沢に届けていた。はじめの作に比べれば、上等な代物になったが、それでもまだ神の腕には届かぬものであった。だが芹沢は左腕の作が好きであった。それは紛れもなく本物の感情であった。芹沢は男の問いに慎重に答えた。

「何を本物とするか、それに依るだろう」

男は満足したように左腕を動かした。

その問答以降、男の作は非常に挑戦的なものが増えた。季節の移ろいに合わせて魚が変わった。梅の花が咲くころ枝にはヤマメがぶら下がっていた。ヤマメの斑点模様は木目によって浮き上がった。梅の花が散り、葉緑が目に見えなくなると季節であるからか、ぶら下がったアユもまた先ほどまで泳いでいたような息吹があった。男の進歩が自身の事の様に芹沢は嬉しく感じた。芹沢はいたずら心で梶無川に魚を浮かべることがあった。泳ぎだせと木彫りに命じて少しの間手を放すが、やはり流されていくだけであった。それでも芹沢は満

足であった。男の魚は水に沈む少しの間だけ泳いでいるように見えるのだ。そのうちすぐに水の上へ浮かんでしまいが、その一瞬は芹沢の不安をとるように清らかなのであった。

男が魚を届けるようになって随分と年月が経った。

魚は文字が書けぬ男からの近況報告であった。調子の良い時は活きの良い魚が届いた。調子の悪い時は魚からも魂が抜けていた。神の腕を意識した若い頃の作に比べれば、最近は穏やかな作が届いた。落ち着いた匠としての貫禄が魚から浮かび上がっていた。厳しい自然を生き抜いてきた力強さ、苦勞の面持ち、魚の老いが作に現れているのだ。まるで神の創る無常の美への挑戦状である。その些末な変化を表現する男の腕と神への執念を芹沢は本物だと感心していた。

ところがある日、ついに魚が届かなくなった。芹沢の不安が実現した日であった。神には老いはないが人間には老いが存在する。やがて死に土へと還る。これは神が人間に定めた不変の法である。芹沢は男の作を見ていると死への不安を感じずにはいられなかった。いつかこの無常の作が失われる不変の時を恐れていたのである。

「もしも魚が途絶えた時は、どうか私のことなど忘れ

てください」

芹沢は魚が届かなくなって漸く男との約束を思い出した。しかし約束を守ることは出来なかった。屋敷の者たちに、その日の勤めを全て放棄してでも男を探るように命じたのである。芹沢もまた馬を走らせて村の隅から隅まで搜索した。その甲斐もあつてか、梶無川の上流、虫の息であつた男は芹沢の屋敷に運ばれたのであつた。その左腕には二匹の魚が握られていた。

男は芹沢の屋敷にて介抱されていたが、意識がはっきりしてくると芹沢に木彫り刀を握らせてくれるように頼んだ。芹沢は一度断つたが、男の目に気圧されて承諾してしまつた。その目にはもう、以前の迷いは無くなつていた。やがて膝をついて芹沢の前に座ると、左前白装束に身を通して木彫り刀を左手側に置いた。「貴方様の前に刀を置くご無礼をお許してください」

芹沢は息を呑んで男の一挙手一投足を見守つた。

「これから話しますは、儂の二つの罪。神への懺悔と過ぎたる力に翻弄された哀れな男の一生にございませ」

男は二つの罪を犯した。神の腕を授かつた男は何をするにも優秀であつた。田を耕せば豊作に、飯を作れば百姓の粗末な材料であつても上等な逸品が並んだ。

博打に勝ち、暴れ馬をなだめ、村中の諍いをその腕を以てして納めた。男は手腕を買われ、戦に駆り出されることとなつた。小柄な体は死から逃げ続けることができた。そして神の腕はどんな相手でも刺し殺すことができた。この時ばかり過ぎたる力に溺れたことはなかつた。熟れた桃の実を潰すようにスルスルと刃が敵の身体を突き抜ける。刃の錆びなど知らぬように、幾人もの人を切りつけた。神の腕は男の思いのまま。否、思う以上に男の命を守るために幾多の命を摘んだ。ある時、刃が貫いた死体から赤い鮮血が右腕に流れた。右手は、親指と人差し指が赤黒く染まっていた。留まることなく、男の汗と混ざり肘まで流れていった。留まる時、男は我に返つた。神の腕を血で汚してしまつた、そう思つた。その戸惑いと同時に彼の右腕は茶色く変わった。血が腐って黒くなるように汚れていった。神の腕としての機能はそのままに、汚れてしまつたのである。これ以降、男は誰一人をも殺せなかつた。生き残るために戦場を逃げ回ることになつた。

命からがら辿り着いた元の村で、男は忌み子となつた。変色した腕では人間扱いをして貰えなかつた。実の父でさえ、梶無川に男を捨て、唾を飛ばした。男はそれ以降、梶無川の魚を食つて暮らしていた。そんな

男の元に母が訪ねてきたのである。母は戦に赴く前と変わらず、心優しいままであつた。貧しい生家から少しの米と作物を届け、魚を採ることを手伝つた。男は母の優しさに腹が立つて仕方がなかつた。

「お前が水神になんぞ、祈るからじゃ、儂はこんな、ヒトともなれん、神にもなれん身の上じゃ、こんな妖のような身の上じゃ」

母が何かしようとする度に、男は殺してくれと懇願した。しかしそれは本心でなかつた。腹が減れば魚を採つて食つた。小刀を左手に持つて切腹しようとしたが、怖気づいて死ぬことは無かつた。梶無川で溺れようにも、役立たずな腕が地を掴み這い上がつてしまつた。普通に生まれていけば、普通に死ねていたならば、そればかりが頭に浮かんだ。それでも男は生きていた。そして母は男の元に通つた。

そんな母もしばらくすると狂い始めた。男が妖となる前、幼子であつた時の様に接した。男はそんな母を氣味が悪いと感じていた。しばらくしてこれが病であると思ひ付き始めたころには、母は男のことを忘れ、父を忘れ、村を忘れていた。元の村にはそんな母を養う人間は誰もいなかった。そうして母もまた梶無川に捨てられたのである。



ある冬の事であった。男は食べるものに困り、村へ盗みに出かけた。神の腕は盗みの才覚をも發揮し、容易く食べ物を手に入れた。男はほんの些細な罪悪感から、とある家の木彫りの人形を盗んだ。そうしてそれを狂った母に与えた。木彫りの人形は母を魅了した。

「おつかさん、おっとさん、あはは」

母は右手に人形を持ち、幼子がするように、床を歩くように動かした。食事時にはその口に魚を運んだ。右腕に赤ん坊を抱くように人形を持ち、左手を寝かすつけるように拍子うった。そんな母を見ると男は母が不憫で仕方なかった。母の頭を撫で、あやす様に

「すまなかつた、腕を忘れて生まれてきたのは儂じゃ、力に溺れて水神様を汚したのは儂じゃ、返してくれ、右腕なんぞ要らんから、おつかあを返してくれ」と泣いた。男は盗みやめようと思った。盗んだ人

形は元の家に返した。食べ物盗んだ家には魚を採って返した。しかし人形がなくなると母は粗末な家の床に仰向けに寝たまま、ぶつぶつと何かを呟き、呆然としていることが多くなった。ついに人間でなくなってしまうと、男は母を懸命に看病した。そのうちに男の頭には人形を作ろうと思ひ浮かんた。

芹沢に会ったのはその時であった。芹沢が男の腕を

切った時、男は大層感謝していた。これで、もう、腕の力に悩まされることは無くなる。切りつけてきた芹沢が恐ろしくて息巻いたが、少し走ると足取りが軽やかになった。そうして大急ぎで家に帰り、呆然としている母に腕がなくなったことを告げたのだった。本当の地獄はここからだ。右腕が無ければ、母の看病など何もできなかったのだ。作る飯も不味く、幼子になった母は問答無用で吐き出した。母の服は吐き出された飯で汚れた。便所に行こうにも、母の身体を起すこともできず、寝たまま糞尿を垂れ流した。痲癩を起す母をなだめることもできなかった。悪夢にうなされる母をあやす力もなかった。男は絶望して芹沢に腕を返してもらいに行ったのだった。

「貴方様に出会え、貴方様のために作を削る日々は、この一生で夢のような時間にごさいました」

男は言った。そうして語った。母の最期を。

左腕で木を削っている時、ふと母が男の名前を呼んだ。男は極限まで集中していたが、その声で糸が切れた。幻かもしれない。だって母は男のことを忘れてしまったのだ。しかし振り向いて母に縋りつき母の着物を濡らした。母の腹に還りたいと、声が枯れるまで叫んだ。足をばたつかせた。痲癩のままに火に掛けた鍋

を右腕で叩いた。しかし母はそれきり何も言わなかった。叱りもせず、心配もせず、その顔は、あばら家に不釣り合いなほど穏やかで美しい顔立ちであった。

その後は男の氣迫を削ぐものは何もなくなくなった。近くを流れる梶無川も、蠅の羽音も、腐りかけた粥の匂いも、男を止めるものは何もなかった。

「芹沢様、儂の身体は汚れとります。自ら妖に身を落としました。死後も人間と扱われることは無いでしょう。しかしこの腕は『神の腕』。お返しせねばなりません。どうかその役目を貴方様に負うていただけませんかでしょうか」

男が話し終わると、芹沢は男の頼みにただ頷いた。男は右手に木をとると、左手で木彫り刀を掲げた。

「これよりは儂の最後の作。最初にして、最期の一品。神の玉座を奪う一罪をご覧に入れましょう」

刃の切っ先はまっすぐに天へと向かっていた。

男は死の淵に立たされて、何も失うものはなかった。木彫りをするうちに男は気が付いたのだ。右腕を削り、人間としての生を削り、母を削った。そうして今、命を削っている。男は自身の作が何一つとして後世には残らないことを確信していた。では何が残るだろうか。残らぬものを作っている、この世に。この身さえも残

らぬこの世に何を残そうとしているのだろうか。屋敷のあちこちに木の削れる音が響いた。規則正しく、削れていく音が響いている。シュツシュツと生まれ、響き、消えていった。右腕が木を回す。左腕が巧みに動き、鱗の一枚一枚に輝きを宿した。男は呼吸さえ忘れていた。芹沢がかつて男の家で見たように、真一文字に口を堅く結び、瞬きもせず、その作に打ち込んだ。まるで妖のようであった。左腕は蛇の如くしなやかに美しくくねる。握られた刃はまるで牙。眼光は獲物を捕らえんとする鷹の様に厳しい。一つの間違いも許さぬとする氣負い。芹沢はその姿を一つも見落とさぬように見続けた。しかし芹沢は人間である。瞬きせず、男を見続けることは無理であった。そしてその姿が、男の最後の姿であると思えば思うほどに、目の前の光景を直視することなど出来なかった。芹沢の目は渴きの痛み、心情の揺らぎで、豊に大粒の水跡を残した。男は芹沢と同じように水跡を作っていた。涙ではない。汗である。神に挑み、神を殺そうとする罪の代償である。全身から水の溢れようと男はなおも刀を入れ続けた。

男の魚は鱗を宿しヒレを躍らせた。目を削り抜くと、ふう、と一つ溜息を零した。そうして男は顔を上げ、

芹沢の顔を見ると安堵したように笑い倒れ込んだ。芹沢の前には一匹の魚が泳いでいた。芹沢は尊き友の約束を、今度こそは守るために、腕を振るった。

芹沢は馬からおりて梶無川を眺めていた。梶無川は清らかに流れていた。いたずら心で、男の作った魚を流した。魚は梶無川を泳いでいった。